長谷川慶太郎著「2010・大局を読む」李白社 2009 年 10 月 16 日刊を読む

小泉改革はデフレ時代に適した「小さな政府」をつくることだった

１．小泉改革とはどういうものだったか。

小泉政権は「改革なくして成長なし」「民間にできることは民間に」「地方にできることは地方に」という基本理念の下に官僚改革、金融システム改革、規制改革、税制改革、歳出改革などの構造改革を進めていった。それが小泉改革である。

２．中身は非常に多岐にわたるのだが、収斂(しゅうれん)すれば、「官僚改革」「規制改革」「税制改革」の三つが小泉改革の要点だと筆者は考える。

(１)具体的には、まず官僚改革では、郵政民営化のほか、特殊法人等を整理して独立行政法人化や民営化などを行った。

(２)規制改革とは規制緩和を推進することで、これは 1000 項目を超える分野で実施された。主なものに株式売買委託手数料の自由化、国内航空の運賃や参入規制の緩和、薬局・薬店以外での医薬品(約 350 品目)販売、製造業への労働者派遣などが挙げられる。

(３)税制改革では税を軽減することである。土地譲渡益に対する税率の引下げ、金融・証券税制の軽減・簡素化、連結納税制度の導入、研究開発・設備投資減税、試験研究費の総額に対する特別税額控除制度の創設、IT 投資促進税制の創設、不良債権処理等への対応(欠損金の繰越期間を 5 年から 7 年に延長)などが行われた。

ところで、筆者はこれまで世界経済全体の基調はデフレであると何度も言明してきた。このデフレは戦争がないから発生するのだが、その威力はますます増してきている。

３．(１)戦争がない状態は人類にとって悪いことだろうか。けっしてそんなことはない。非常に良いことである。戦後の日本は平和国家となって一度も戦争に巻き込まれなかったから、高い経済成長が遂げられたのだ。

(２)ただし、戦争のない状態が維持されると世の中に物も人も溢(あふ)れてくる。当然ながら、物の値段が下がり賃金も下がっていく。これはやむを得ないことだが、政治で大事なのはこうした世界の大潮流を外した政策を行ってはいけないということだ。もしそんな政策を実行してもすぐに失敗する。

４．(１)同じように、物の値段も賃金も下がるデフレ時代には「大きな政府」は向かない。したがって、絶体に政府を大きくしてはいけないのである。

「大きな政府」になるのは国民生活の隅々まで行政で面倒を見ようとするからだ。その場合、

どうしてもさまざまな規制が増えていく。となると、多くの規制をきちんと守らせるために行政組織を大きくして官僚の数も増やしていかざるを得ない。つまり、「大きな政府」では組織が肥大化し官僚が多くなって組織維持のための経費や人件費が増えていき、増税が必要になってくる。

(２)だが、「小さな政府」であればこの反対の流れになるので、政府を維持する費用も少なくて済む。「小さな政府」なら税負担を軽減する政治が行えるとも言える。

(３)というわけで、デフレ時代になっても「大きな政府」のままだとすれば、それを「小さな政府」に改組しなければならない。小泉改革はまさに世界的なデフレの基調に日本を合わせていこうとしたものだった。官僚改革、規制改革、税制改革を通して「小さな政府」を志向しようとする小泉改革はデフレ時代に合っていたのだ。

　そして、小泉改革のなかでも郵政民営化こそが「小さな政府」を目指す象徴的な第一歩だった。

(４)政治が官僚組織を小さくしようとするとき、各省庁に対して一定の人数だけ辞めさせろと命じても、官僚はけっしてそれに応じないし必ず逃げ道をつくってしまう。もし本気で官僚組織を小さくしようとするなら、一つのまとまった官僚の集団を一気に潰(つぶ)してしまえばいい。

(５)それを実行したのが郵政民営化だった。これによって約 24 万人の郵政職員が公務員から民間人になったのだから、政府の行政組織がそれだけ小さくなったわけだ。

５．(１)郵政民営化と同じ手法を政府の他の行政組織に応用すれば政府は小さくなっていく。ところが、郵政の次の大きなターゲットに手を付ける前に小泉首相は政権を降りてしまった。

(２)しかし、小泉首相の問題は、小泉改革の意義もその目玉である郵政民営化の本当の意味も国民に向かってきちんと説明しなかったことだ。国民に対してだけではない、同じ小泉内閣の閣僚たちにも一度も説明したことがなかった。

P19 ～ 23

［コメント］

このようにして小泉首相の中途半端さ、説明不足のために 2009 年 8 月 30 日の総選挙で自民党は大敗し、民主党が政権を取るに至った。「郵政民営化の意味をまったく伝えなかった小泉首相」、「『小さな政府』づくりの意味を国民に伝えなかった小泉首相の大罪」と批判されても仕方がないとも考えられる。これからの日本や世界を考えるとき、長谷川慶太郎先生の視点は極めて示唆に富むものと高く評価したい。

－ 2009 年 10 月 8 日 林明夫記－